

# 19 世紀ヨーロッパの女性文化

——反骨者ジョルジュ・サンドが視た夢——

---

阿部慧志      博士課程前期 1 年

## 1. 序論

私がジョルジュ・サンドという女性について知る様になったのは、大学生時代の卒業論文の際に用いた文献の中でである。20 世紀の女性ファッションデザイナー、ココ・シャネルを主軸とした調査の過程でその名を見つけ出した。その繋がりで発見したサンドの自伝『我が生涯の記』（Histoire de ma vie）に、以下の文章がある。

しかしながらベリー地方[サンドの故郷]の私の若い友人たち、私の子供時代の仲間たちが私と同じくらいわずかな生活費でパリで暮らし、知的な若者の興味あることすべてに通じているのを見ていた。文学的および政治的出来事、劇場や美術館での感動、クラブや街角での興奮など、彼らはすべてを見ていた、彼らはどこへでも出かけて行った。（中略）しかしパリの舗道では、私はまるで氷の上の船のようであった。華奢な靴は二日で壊れてしまった、泥除け[ヒールが高い]木靴は私を転ばせ、私はドレスを持ち上げることに慣れなかった。（George p. 1198. 及び加藤訳 p.570）

この文章から私が論証として取り入れたもの、それはサンドが「パリの舗道が歩きづらかった」という点である。ではなぜ歩きづらかったのか？文章にもある通り、それはドレスやヒールの高い靴を履いていたからだ。ならばなぜそのような不便な服装をしていたのか？それはその服装が当時の「一般文化」だったからであった。しかしサンドはそのような不便を強いられる文化に甘んじていた訳ではない。同じく『我が生涯の記』において以下のような記述がある。

長靴がどんなに私を喜ばせたか言葉もないくらいだ。（中略）小さな鋌をつけた踵で私は舗道の上を安心して歩けた、私はパリの端から端へととびまわった。私は世界一周もできるように思えた。それに私の

衣装は何も恐れさせなかった。私はどんな天候にも駆け巡った、私は時間を問わず戻ってきた、私はあらゆる劇場の平土間に座ったものだった。(George p. 1198-1199. 及び加藤訳 p.571)

この記述はサンドが母・デュパン夫人から男装を勧められ実行した際の感想を記したものである(図1)。ここからは、男装による不便からの解放への喜びが溢れている。実際に周囲の人間は彼女が本当の男性と見間違える程だったとされ、当時の新聞紙『ル・シャリヴァリ』にも風刺画として載せられている(図2)。

しかし風刺画にもされているように、なぜジョルジュ・サンドの男装がこのように注目の的とされたのか? 19世紀において彼女のような男装をする女性はどう見受けられたのか? 私がジョルジュ・サンドという女性に惹かれた理由には、恐らくこれらの疑問が中枢を成していると思われる。そこで今回は彼女を主題とした修士論文に向けた土台として、19世紀中のヨーロッパの女性の服飾文化に触れながら、女性達にとっての19世紀を考察したいと思う。

## 2-1. オートクチュール発祥前後までの略歴

まずこの服飾文化を述べるにあたって述べなければならないのは、当時の服飾文化の中枢を成していた高級服飾業界、オートクチュール(haute couture)である。このオートクチュールの起源、すなわち近代服の誕生を説明するには、フランス革命が発生した1789年頃のフランスについて述べておかなければならない。

当時の女性モードの中心に立っていたのはマリー＝アントワネットである(日置 p.12)。浪費癖で知られた彼女の生涯は結果的に自身と夫をギロチンへと導いてしまったが、同時に当時の女性のスタイルの中核を担っていたのも事実である。加えて彼女の前にスタイルの中心にして、近代以前の服飾文化末期の例となる人物に、ルイ15世の愛妾・ポンパドゥール夫人があげられる(日置 p.12)。ここではまずこの2人から、近代の服飾文

化への変遷を見ていきたい。

注目すべき点はこの2人が好んで着用していた服である。ポンパドゥール夫人に注目してみると、彼女の服装はそれまでのロココ様式の美的価値観を引き継いでいると言える。当時の慣例として、女性は胸部の corsage に加えてスカート幅を釣鐘状に広げる下着・パニエを着用していた（千村 p.34）。かねてより腹部を強く圧迫していた corsage に加え、このパニエはより女性の身動きを封じる物となっていたが、女性達の細いウエストを強調できる画期的な下着として、一目人気を集めた。さながら釣鐘になったボディライン、それこそが当時の最先端の流行だったのである。特に1755年のポンパドゥール夫人の肖像画（ルーヴル美術館蔵、図3）を見ると、corsage によって狭められた上半身とは対照的に下半身のスカートは広々としている。ただ一方で装飾は、生地の上刺繍や小さなリボン等に留められ、比較的控えめである。

対すマリー・アントワネットはこのポンパドゥール夫人に似た装飾過多なドレスばかりを着ていたわけではない。後年の彼女は「シュミーズ・ドレス」という、白い綿でできた簡素なデザインのドレスを好んで着ており（図4、日置 p.13）、革命の1年前ほどは、イギリス調の過剰な装飾がないシンプルなドレスを着ていた。前者のシュミーズ・ドレスは「王族に相応しくない」と批判も受けたが、フランス革命後「ローブ・アン・シュミーズ」と名を変え、パニエや corsage を取り払った、ゆったりとした服装から、1820年前後の変革まで、王侯貴族の女性を中心に人気を博した（ブラック, p.10）。

このようにオートクチュール以前のモードは、王族や貴族等一般庶民の人間からは遠い存在となる人間達が中核となっていたのである。後述するナポレオン3世の王妃ウジェニーの時代を見ても、一般の女性達は基本的に彼女への憧憬を抱きながら、自身のオシャレを追求していたのが分かっていくだろう。

こうした高貴な人間が着ていた服に憧れ、一般の国民はそれを真似たいという感情がわき上がっていた。そんな人々の願望の橋架けとなって誕生したのがオートクチュールである。

## 2-2. オートクチュールの展開

オートクチュールの創設者として上げられるのはイギリス人のシャルル・フレデリック・ウォルト（Charles Frederick Worth、英:チャールズ・フレデリック・ウォース 1825 年-1895 年）という人物である（日置 p.61）。彼は時の皇后であったウジェニーを始め、王族や貴族など高位の人間を顧客に取り、次々に依頼された服を仕立てていった。基本的に彼は水彩画のスケッチでデザインを顧客に見せ、そこから選ばれた物を順々に仕立て上げるという商法を取っていた。その中でも彼が発案したドレスは全体的にスカート丈が長く、そして優美という言葉が似合うだろう。それには当時のトレンドとして存在していた「ロマンティック・スタイル（Romantic Style）」という存在が一因している（日置 p.54）。このロマンティック・スタイル（又はロマンティック・モード）とは、19 世紀の精神運動・ロマン主義が根幹を成しており、以降 20 世紀初頭までの女性服飾史の礎を築いた期間と言える。期間を分けると、1820 年前後から二月革命の 1848 年までを発展期、1850 年前後から 1870 年までを最盛期と分けられる（日置 p.54）。

着目すべき時代は、1820 年前後の期間である（ブラック, p.144）。前述の通りフランス革命後は、コルセットやパニエと取り払った、シュミーズが流行していた。しかしこの 20 年から 22 年までの間に、シュミーズの流行は影を潜め、再びコルセットの時代が訪れたのである。これは 18 世紀までのブルジョワ階層の服装の復刻版と言えるものである。これこそが後のウォースが展開したロマンティック・スタイルの雛形と言えるだろう。そしてこの時に女性服の流行の中核にいたのが前述したウジェニー皇后である。

以下の文は『女性の服飾社文化史』より引用した、ウジェニーとルイ・ナポレオン（後のナポレオン 3 世）が出会ったマチルド皇女（ルイの従妹）のパーティでの一節である。

ウジェニーは美しい肩や胸を引き立てるロマンティック・スタイルの衣装を装って、情感と活力と優美さにあふれていた。(中略)翌年1月に、ノートルダム大聖堂でルイとウジェニーの結婚式が行われた。彼女はレースをふんだんに使い、胸や肩をあらわし、細いウェスト、裾広がりの豪華なスカートのウェディング・ドレスを着て、花嫁になった。(pp. 60-61)

このように、ウジェニーは即位前より当時のモードの中核となりつつあった事が窺える。ウジェニー推薦のウォルト製のドレスは瞬間に流行の最先端をいく事となり、ウォルトのオートクチュール業界での地位は確立されていったのである。また後にウォルトは、「フランス・クチュール組合 (The Chambre Syndicale De La Confection Et De La Couture Pour Dames Et Fillettes)」を1868年に設立し、現代までのオートクチュール業界の礎を築き上げている。

### 2-3. コルセットによる緊迫

このようにして男女間の服の差別化は明確なものとなってゆき、女性はより一層豪華なドレスを求めるようになっていった。豪華なドレスとは上記のウジェニーの例のように、リボンやフリルで飾られ、丈は長く、そしてウェストは可能な限り締め付けるフォームへと変化していった。ここではまず、上記のような窮屈なドレスの要と言える「コルセット」に着目していきたい。

まずコルセットは、簡単に言えばウェストを細く見せる為の道具であり、女性独特のくびれを見せる為の物であった(図5、図6)。特にロマンティック・スタイルの流行後、より一層のコルセットによる緊迫化が要求されるようになり、女性の健康問題が取り上げられるようになっていった。

なぜこのような窮屈な下着を女性達は強要されるように身に付けていたのか？それには当時のロマンティック・スタイルの根幹を成していた、ロマン主義による女性像の過度な美化と歪曲が原因となっている。

著書『モードの社会史』において、筆者の能沢慧子は以下の様に述べている。

ロマン主義の、繊細、無邪気、清浄なヒロインたちのイメージの上に、(中略) 虚弱で、もちろん働くなど思いも及ばないというブルジョワジーの描き出す女性のイメージが重ね合わされる。後者は次第に女性たちの中でエスカレートし、健康な生き生きとしたよりは蒼白く赤味のない、黄ばんでさえ見える顔色、熱に潤んだような遥かな眼差し、時には目の回りの病みやつれたような隈までが、ファッショナブルな女性の憧れとなった (p.196)。

筆者のこの見解は、上述した 1820 年代前後の変革期が影響しており、コルセットが女性の身体だけでなく、精神や社会的立場をコントロールしていた事が見受けられる。また別の観点として、1837 年より発足したイギリスのヴィクトリア王朝においても、関連した女性像が見て取れる。その最たるものとして「家庭の天使」という言葉が存在する (日置 p.76-80)。そこには女性自身の選択の余地は無く、家庭内での、世間一般としての、そして何よりも男性にとっての範囲でしか、女性の価値観は認められていなかったのである。

このように女性自身の不自由が蔓延るロマン主義や「家庭の天使」という理想像。コルセットはそういった不自由を象徴しており、女性達に決められた選択肢を決定付ける為の拘束具として、そして強要ではなくありふれた常識として、その存在を確立していったのだと思われる。

## 2-4. 反骨者の登場

このようなロマンティック・スタイルの流行やコルセットの普及により、女性達の服装は非常に窮屈なものであった事、そして同時に先述したジョルジュの様に、当時の服飾文化に疑問を抱き、異議を唱えた人物が既に存在していた事などが窺い知れる。ジョルジュ同様に異議を唱えていた

人物にはアメリカのアメリア・ブルーマー（Amelia Bloomer, 1818-94）という女性がいる（濱田 p.110）。彼女は友人の紹介から女性の権利大会に参加を切っ掛けに、当時女性が公的に参加できなかった禁酒協会を独自に創設し、発布していた機関紙『リリー』（Lily, 創刊 1849 年）をフェミニズム運動の機関紙へと変え、積極的に女性解放運動に参加していった。特に有名な運動として、足を覆う程に長かったスカートの丈を腿下までカットし、トルコ風ズボンを履く「ブルーマー・コスチューム」という服装の発案が上げられる（図 7）。この「ブルーマー・コスチューム」の説明に入る前に、当時のアメリカ服飾文化を簡潔に説明したいと思う。

19 世紀中期のアメリカでは中流階級の女性を中心として、ヨーロッパより流れ込んできたスタイルが流行していた。コルセットでウェストを絞り胸を押し上げ、下は 4 枚ほどのペティコートと下着スカートを履くといった、文字通りヨーロッパの流行が流用されていたのである。実際に以下のようなエピソードがある。

アメリカ女性たちは、時代遅れのスカートの後ろ腰に、丸めた新聞紙を入れてお尻の部分をつくらせ、これを貴族女性好みのバスル衣装にみせかけた。彼女たちは、丸めた新聞紙のせいで、後ろのスカート丈がやや短くなって吊り上り気味なのを気にしながら、上からコートをまとうて教会に参列した。（中略）19 世紀末に至っても、依然、彼女たちはフレンチ・ファッションに憧憬の念をいだき、身体にぴったりした S カーブラインのドレスを苦心して手に入れ、胸と臀部を突き出して、フランス風に装おうとこれ努めた（濱田 p.2）。

上記のエピソードにある通り、当時のアメリカの服飾文化はヨーロッパ文化の流用だったのである。このようなモードの中で現れたのが先述のアメリア・ブルーマーである（濱田 p.110）。アメリア・ブルーマーは 1818 年にニューヨークのホーマーで生まれ、1840 年に弁護士でジャーナリストでもあるデクスター・ブルーマーと結婚した。当初彼女が興味を持っていたのは禁酒運動であったが、後に女性の社会的地位の向上へと目を向け、



同種の運動にも協力姿勢を見せていった（日置 pp.93-94）。そこでまず彼女が利用したのが先述した機関紙『リリー（Lily）』である。元々は禁酒運動に直接参加できない女性のための禁酒協会で使用された機関紙であったが、これをフェミニズム運動の機関紙に変えたのである。

その後の 1851 年に彼女が提唱したのは「ブルーマー・スタイル」という、当時の流用されたヨーロッパの流行の観点からみれば、斬新なスタイルだった（図 7（濱田 p.110））。ただしこのスタイルはブルーマー本人が開発したものではなく、元々は友人であるスタントン夫人の従姉妹のエリザベス・スミス・ミラーという人物が、スイスの結核療養所で見た入院患者のパジャマ風の服が発端となっている。長いトルコ・パンツに膝丈の短いスカートを重ねて履くという点が特徴的であり、現地の医者が当時の重い女性服から結核患者の体を開放するために考案した物だった（日置 p.99）。ミラーはこの衣装を旅行着として仕立て、アメリカに持ち帰った。この衣装を見たスタントン夫人は以下の様に語っている。前者は衣装を着たミラーを見た際の、後者は実際に着た際のスタントン夫人の感想である。

私のいとこ〔ミラー〕が片手にランプ、もう片手には赤ん坊を抱き、楽々と階上へ歩くのに対し、私は垂れ下がるローブのためにランプや赤ん坊など問題外で、スカートをたくし上げてかろうじて階段を上った。私はただちに女性の衣服の改革の必要性を痛感し、すぐにいとこと同様の衣装を身につけた（濱田 p.111）。

鎖と錘から開放された囚人みたい。（中略）雪や雨の中をさっそうと歩くことができるし、山に登ったり、庭で働いたり、さまざまな動作に適している。歩く時、裾をつまみ上げたりする必要がないなんて、引きずるような長いスカートをはいていないと、何という開放感が味わえるのでしょうか（日置 p.100）。

最終的に「ブルーマー・コスチューム」の流行は約 1 年という短命に終

わっているが、アメリカ各地にまでこの流行は広まっており、ここからも当時の女性の多くが当時の最新流行と謳われていた、コルセットの装着やスカートの膨張を利用した、世間一般の美人像に不平不満を感じていた事は明白だろう。そしてこの流れはやがてオートクチュール業界にも取り入れられていく。

### 3. 服飾史のまとめ

ここまで説明した服飾史を振り返ると、女性を取り巻く環境がいかにも不自由に満ちていたのが窺える。またこの服飾史にはもう1つ見落としてはいけない点がある。それはこれらの服飾史がウォースを始めとする男性によって成り立っていた事である。例えば自分が当時の女性で、「着てみたい」と思うドレスのデザインが頭の中にイメージされていると仮定する。当時の女性達が憧れていた上層階級への仲間入り、果ては貴族等と繋がりを持って舞踏会などの社交界の場へ赴き、あわよくば王族の最先端のスタイルを拝見したい。それが当時の女性達が知らず知らずの内に抱いていた夢であり願望であったのだろう。

しかし、この当時高級服を仕立て上げるデザイナーは主として男性であって女性本人ではない。もちろん家庭に留まっていた女性も、自ら仕立てる事もできただろう。だがそれでも、彼女達はより自身の社会的イメージを上げる為に、高価なドレスの方を所望していたのである。しかし、当時のオートクチュール業界には女性の「着たい」というイメージや願望を真に理解し、服を仕立てるデザイナーはまだ存在しなかったのである。

### 4. 現時点の見解と展望を結論に代えて

以上の服飾史をジョルジュ・サンドの男装行為と重ねると、ジョルジュと同時代の「女性の普段着」とされていた物が、フランス革命以前より伸び続けていた、王侯貴族への羨望や崇拜の念の地続きによって継承された産物であった事が見て取れるだろう。そこにあるのは過去が存在となった

はずのフランス革命前の文化的象徴、そしてそれによって生じた男女間の差別化を徹底した事による、「過去の遺物」とも言うべき存在だったのではないだろうか。異国の地で一度は社会問題となったブルーマー・スタイル。しかしその問題も時の流行というある意味での「絶対的存在」がねじ伏せてしまった。これらの事象が渦巻くフランスにおいて、ジョルジュがとった男装という行為はやはり「禁忌」と言えるものだったのかもしれない。現代では一般的なものとして扱われる服飾の自由。それがサンドが生きた時代のヨーロッパでは厳しい制限があったという事実は実に興味を惹き付けられる題目であった。

このように 19 世紀とは、女性の存在が表立って男性に劣る者として扱われ男性が作り上げた文化に従わされた時代だったのである。そしてこのような時代において、ジョルジュ・サンドが自身の作品においてどのような思いを込め、更には二月革命を始めとした生前の時代の流れに身を投じていったのか？ 今後はこれらを更なる研究課題として、より深部にまで調べて行きたいと思う。

## 参考文献

- エントウイスル, ジョアン 『ファッションと身体』 鈴木信雄訳、日本経済評論社, 2005 年  
加藤節子訳『我が生涯の記』第 2 巻, 水声社, 2005 年  
千村典生『新訂増補 ファッションの歴史』平凡社, 2001 年  
デュロゼル, ブリュノ『20 世紀モード史』西村愛子訳, 平凡社, 1995 年  
能沢慧子著『モードの社会史』有斐閣選書, 1991 年  
能沢慧子『二十世紀モード 肉体の解放と表出』講談社選書, 1994 年  
濱田雅子『アメリカ服飾社会史』東京堂出版, 2009 年  
日置久子『女性の服飾文化史 新しい美と機能性を求めて』西村書店, 2006 年  
ビューモント, アン『コルセットの着用と人体』(2000) :chs.1-3. 24 Nov. 2014  
<<http://www.corset.jp/Body/chapter1.htm>>  
ブラック, J・アンダーソン、ガーランド, マッジ『ファッションの歴史  
[下]』  
Sand, George. Histoire de ma vie. QUARTO GALLIMARD, 2004



図1 男装を実行したジョルジュ（右）

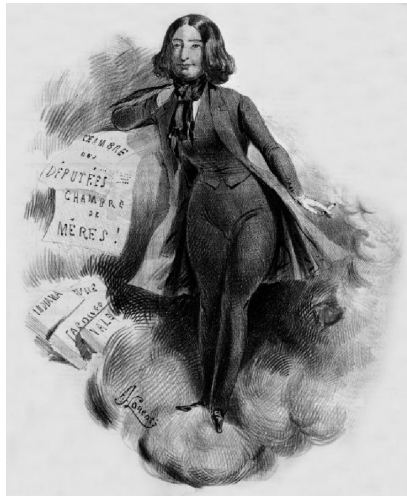


図2 『ル・シャリヴァリ』に掲載された  
ジョルジュの風刺画  
A.ロレンツ画 1842年



図3 ポンパドール夫人の肖像  
モーリス・ラ・トゥール画 1755年  
ルーヴル美術館所蔵



図4 シュミーズに身を包む  
マリー・アントワネット



DOUGLAS & SHERWOOD'S CELEBRATED TOURNURE CORSET.  
(Print view)  
(Patented January 4, 1855.)

296

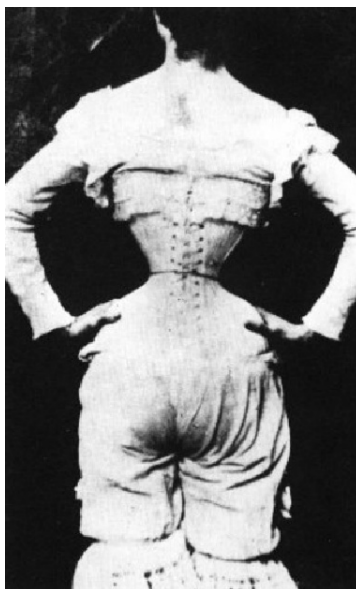


図5、6 コルセットを着用する女性



図7 ブルーマー・スタイルの女性 山内沙織訳 PARCO 出版, 1985 年

